

ヒブリア

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
図書委員会
昭和62年2月28日

No. 61

福島高専 図書館報

◇ 卷頭言 ◇

※本との出会いを求めて※

機械工学科 佐藤 新太郎

本は私にとって素晴らしい友人であり、尊敬する先生でもある。自分の都合のよい時、どんな所でもつきあえる友人であり、何でも教えてもらえる素適な先生なのである。私はとくにこれといって買うつもりがなくとも何となくぶらっと本屋の書棚を眺めていることがある。眼鏡をかけたり、はずしたりしているうちに目が疲れてきて、大抵は何も買わずに出てしまうことが多いのであるが、それでも勝手に数日もたないうちにまた本屋をのぞきに行くのである。若い頃、よく古本屋をさまよいまわった習性が残っているのかも知れない。

人は誰でも何かに関心を持ち、そのことをもっとよく知りたいと考える。これは人間として極めて自然な知的欲望である。これらの欲求は人とのふれあいの中で満たされること多く、良き師、良き友を若い時に得られる人は幸福である。作家の芹沢光治良は『こころの窓』の中で、「一人の友達をつくるということは、新しい世界を発見する喜びや驚きがあって、人間の心を若く洗いたててくれます。ですから人間の出会いを大切にしたいものです。」と書いている。私の場合、決して昔の習性だけでなく、心から語り合える友や目を開いてくれる先生との出会いを求めて、本屋に立寄るのではないかと思う。

近頃の若い人は本を読まなくなったということで、いくつかの実態調査が行われている。それらの調査によれば、読書の上位は必ず漫画、週刊誌、レジャー誌などの娯楽誌で占められているが、そこには問題意識を掘りおこすような主知的な意欲が感じられないのである。飽食の時代に育つと人間らしい悩みに煩悶しなくなるのか。モータリゼーションが車のフロントガラスに写る風景を世界のすべてと錯覚させてしまうのであろうか。

数年前に桃井かおりがモデルになった新潮文庫のヘッド・コピーに「知性って、すぐ眠りたがるから……若いうちよ」というのがあった。これで若い知性がどれだけ目を覚まして文庫本が売れるようになったかは知らない。三度の食事は忘れないが、心の糧を忘れても飢えを感じないというのは人間としての進歩が望めないと思う。旺盛な知識欲をもち、心の感銘を求めて生きたいものである。友達間でもお互いに心の糧について語り、千円の肉は我慢しても千円の本を買う気持が欲しいと思うのである。それにしても、いわき市には飲屋は多いが、目欲しい本屋が少ないのはどうしたことだろう。

目

次

卷頭言	1
随想	2
後輩に勧める本	13

学生卒業研究一覧	24
新着図書目録	28

※ テキサス大学の図書館 ※

一般教科 藤 井 誠

学校の良し悪しは入学試験の難易度と常に一致するとは限らない。日本の場合は特にこのことは顕著であるように思われる。アメリカの場合は入学試験の難易度以外の基準を用いて、より総合的に学校の評価を行っている。アメリカでは「クロニクルズ・オブ・ハイヤーエデュケーション」などといった雑誌によく大学の学部別ランキングが掲載されている。それによると、学校の良し悪しは、教授陣の質、教授内容のレベル、学生の質、それに教育設備の充実度などが主な基準となっている。このうち、設備の良し悪しという点において、図書館は高い地位を占めている。特に現代のように情報化社会と言われている時代においては、図書館の果たす役割はますます重要性を増してきている。にもかかわらず、知的水準が米国より高いと自負している日本人がいる現在、残念ながらこと図書館学においてはアメリカの後塵を拝している。米国の主要大学では情報科学の一分野として図書館学は幅広く、そして深い研究がなされている。

このように米国で図書館学の研究が盛んである理由の一つには、図書館が教師、学生の知的好奇心に応じた的確な情報を提供することによって、より創造性の高い研究がなされることが期待できるからである。それにより学校の評判は高まり、学校はさらにより良い教師、学生を集めることが可能になるのである。

図書館というと、まず第一にその蔵書量に目がいくのではないだろうか。米国の『ワールド年鑑'82』によると、全米の大学一の蔵書量を誇る大学はハーバード大学である。蔵書量は900万冊を越えている。テキサス大学も400万冊を越えている。おもしろいのは日本と異なり本が増えて書架が一杯になると、価値のないと判断された古い本から順に一ポンド〜ドルといった具合に安く売ったり、廃棄してしまう図書館が多いのである。

テキサス大学の場合には、中央図書館を中心に

分野別にいくつかの図書館が点在している。学部の学生の為にも一つ大きな図書館が用意されている。またアジア図書館というのもある。そこには日本でもお目にかかれないような戦前の古い出版物から最近の雑誌まで、驚くほどの日本関係の本が収められている。新聞もニューヨークで印刷された「読売新聞」が航空便で届けられていた。日本より3日遅れではあったが、日本の様子を知るのには十分であった。

マサチューセッツ工科大学のある図書館のように24時間オープンしているところもある。テキサス大学の中央図書館は夜12時で閉館である。夜はさすがに大学構内といえども危険なので、車のない学生は大学の内外を走っているシャトルと呼ばれるバスを利用することになる。シャトルの路線から離れている学生、特に女学生の為には特別なサービスが用意されている。大学の警察へ連絡すると大学のパトカーで家まで送ってもらえるのである。

図書館の中にはいろいろなサービス施設もある。地下一階にはゆっくりとくつろいでスナックや飲物を楽しめるコーナーやタイプ室やコピーのサービスカウンターもある。さらにインターライブラリー・サーキュレーションによって、テキサス大学にない本や論文もたちどころに州の内外から取りよせてくれる。本当にいたれり尽くせりである。この図書館の充実ぶりが、アメリカ人が個人ではあまり本をもっていない、ということにもなっているのではなかろうか。

学習するためのスペースも十分にとってある。いろいろと閲覧しながら、すぐ傍の机で読書や勉強をすることもできるし、必要とあらばロッカーも貸してくれる。数日にわたってレポートを書く時など、多くの本を集めてロッカーの中に入れておけば、毎日すぐに仕事にとりかかれるので時間の節約になる。また、場合によっては防音されている小さな部屋も貸してくれるので、そこでタイプを打つことも可能である。

テキサス大学の図書館は週末も平日と同様に開館していたので非常に助かった。特に、語学のハンディキャップのある小生のような外国人学生にとっては週末といえどもゆっくりと遊んではいられなかった。そして、一般的に勤勉な韓国、台湾

などの東南アジア系の学生が多数テキサス大学で勉強していたので、金曜日の午後から週末にかけて図書館にいて、まるで東南アジアにきて勉強しているような錯覚に落ちいることもあった。

✿ 異質な人とのつきあい—読書— ✿

機械工学科 佐藤 顕 二

現在は技術融合の時代に入り、多くの産業で異業種との交流や提携が盛んになってきた。人の交流も盛んである。異質な人とつきあうことは、いつの時代でも自分のためになり、いろいろな事が分かり、大変面白いことである。人と話し合うことの少ない僕にとって、読書は異質な人とつきあうにも等しいものの一つである。本屋で書名を見、まえがき、目次、あとがきを読み、著者の略歴を知り、ばらりと一覽してその大略を掴んで本を求めている。本屋でのこのような「眺め読み」を通じて、異質な人に接することは楽しいことである。以下、書棚の中から印象に残った興味深い本を5冊程紹介してみたいと思う。

技術者の体験論はその人の生きざまを書いたものとして大変興味深いものがある。

* 隗より始めよ (本田技研工業元副社長 西田通弘著) ~ 書名は創業者本田宗一郎氏と藤沢武夫氏がよく使われた言葉で、又お二人がその実践者であった事から書名にされたようである。若い人には難解な漢字であり、その意味も分らない言葉と思う。中国の戦国時代に郭隗が燕の昭王に述べた意見で、「何事も手近かなことから始めるがよい」とか「云い出した人自身から始めよ」と云う諺になっている。ホンダが零細企業から今日の大企業にまで発展した30年間、最高参謀として自発性、創造性に溢れた人間尊重の社風づくりに注力された著者の人柄が滲み出た体験論である。

世の中には対立する二つがいつも存在する。僕は非とか無とか異とか……どちらかと云えば否定的な文字での論理が好きである。

* 「常識」の非常識 (評論家 山本七平著) ~ 『根拠なき前提がいつしか「常識」となって通用し、人々の思想がそれに拘束されると、社会の通念に従って常識的に考えかつ行動している積りが、結果において意外な非常識となってくる。その点の指摘が本書の基本的な主題』と著者がはしがきで述べておられる。世事万般、視点を絞って別の

見方をし、総合的な判断を下してこそ真の常識が成立つ事を書いたエッセイである。

* 「勉縮」のすすめ (朝日新聞論説委員 松山幸雄著) ~ 無制限の軍拡ひいては国内経済の破壊を防止する「軍縮」にひっかけ、受験戦争による人間の破壊と云う弊害をなくすために「勉縮」のすすめを説いたのが書名の謂れである。政治記者として滞米生活10年余の体験をもとに、国際社会に巣立つ世代のあり方について書かれた広い視野と深い洞察を含む警告の書である。

* 「無分別」のすすめ (東工大教授 森政弘著) ~ 『膨大な知識を殺用しないで活用するのは智慧によるが、その智慧は無分別から生まれる。学校教育においても、「忘」と云うことは悪として把握されているではないか。本書は「忘」の必要性を述べさせていただいたものと云ってもよい』とあとがきで述べられている。そして、副題の「自在に自分を動かす」秘訣は無分別即仏の智慧であることを説かれた書である。著者はロボット工学の権威であり、仏教に造詣の深い方で、他に「非まじめ」のすすめ 等多数のユニークな著書がある。

* 異端のすすめ (経済専門家 長谷川慶太郎著) ~ これまでの常識とかなり違った発想で企業戦略を押し進め、個人差・能力差を認めた上で個性を伸ばして異質な人材を育てることが、企業成長を左右する決定的要素であるとして異端のすすめを説いた経営における人材論である。

時代は歴史的転換期を迎え、社会の意識が精神的、文化的な豊かさを重視する方向へと変化しつつある。異質な人と接する機会が益々多くなろう。我々は物の見方、考え方を柔軟にして、時代の趨勢に対応していかななくてはなるまい。

✿ 読書雑感 ✿

電気工学科 奈良 和 久

少し暇があると、私は本屋に出かける。本棚には、多くの本が並んでおり、私はその背文字を片端から読んでゆく。新聞、雑誌等に書評が出ていたりして、少しでも興味を持った本は、すぐ取り出して読み始める。面白いと思うとかかなりの分量を読んでしまう事も良くある。一連の著書を読んでいる作家の新作も見逃せない。解放感にひたりつつ、あれこれ本を選択する時間は私にとって実

に楽しい一時である。

さて私が読んで特に印象に残った一冊の本を紹介してみたいと思う。それは立花隆著「宇宙からの帰還」である。人間は常に未知の分野を目指し、遂に宇宙に進出する事となった。ロケット、コンピューター、等現代先端科学機器を極限まで利用して宇宙への旅は成立する。宇宙飛行士達は、宇宙船を動かすために必要な科学、工学の諸知識を身につけねばならない。その他実施についての厳しい訓練が待ち受けている。彼等は厳しい採用試験を受けて合格しており、理工系の能力は抜群であるが、文科系の学問の素養は、そう高いわけではない。又宗教に対しても特別の関心があるわけではない。これらの人々が宇宙体験を経た後で、どのような精神的変化を受けたのかというのがこの本の主題である。彼等は科学技術的事柄に関する検討はよく行っているが、この様な内面の変化については、お互いの間でも話をした事は無く、ましてレポーターより質問を受けるのは初めてである。その内容は実に驚くべきものであって、彼等は一樣に神の存在を感じたと告白しているのである。宇宙より見た美しい地球の姿に感動し、この様に美しい調和が保たれているのは、偶然の結果ではあり得ず、何等かの宇宙的規模の意志によるものであると直感的に悟らされる。又この事を最も強く感じるのは、地球周回軌道にある宇宙船の中ではなく、船外活動を行った時及び月への軌道にのっている時であった。特に月に向かって進む時は、巨大な暗黒の中に青白く光輝く地球を見るわけであるが、やがて視野の中に地球のすべてが入る事となる。即ち全人類が自分の視野の中で動く事となる。しかも地球上の時間の流れを直接自分の眼で見る事となる。地球のあらゆる営みが彼等の視野の中で展開され、彼等の発言を借りれば、神の眼で地球を見る事となる。この時彼等は神の存在を直感的に感ずる。ある者には、神がすぐ自分の側に実在するのが実感されたという。先端科学技術を駆使して宇宙に駆け登った時、人間の心の中に神の存在が実感されたという事は大変興味深い。宗教の創始者達は、いずれも地上にいて宇宙的視野（コスモセンス）を体験した人達であるといわれるが、現在では宇宙船の出現により、ごく普通の人間がコスモセンスを手に入れる事ができる事となった。一体宇宙にのり出して広大な暗黒を見た時、自分の胸中にどのような感懐が湧き出するのか、誠に興味深い。この他科学に対する次の様な指摘もあり大変参考になる。科学は様々の事象が如何にして生起するかを指摘できるだけで

あり、何故それがそこにあるのかという根本的な間には答えられないと。

将来人間は必ずスペースコロニー（宇宙植民地）を建設し宇宙に進出する事であろう。これに必要な技術は現在でもすべて開発されており、後はコストの問題のみであるともいう。コロニーではコスモセンスを身につけた精神的にも肉体的にも全く新しい人類が誕生するであろう。是非一読する事をすすめたい。

※ テレビ、ビデオ技術の展開 ※

電気工学科 山崎 数彦

日本国勢図会という本がある。表題どおり我が国の国勢を統計資料にもとづいて表や図に表わしたものである（矢野恒太記念会編）。昭和2年に初版が発刊された。当時、「学校の社会科で教えているような知識を一般社会人にも知らせたい」と思い、統計資料を利用して普及をはかった。」のが本書のねらいであった、と「まえがき」にある。ビブリアでも「私のすすめる本」として何度か紹介されている。

私の所有しているものと図書館にあるバックナンバーの何冊かを参考にして、私達の生活に深い係りのあるテレビ、ビデオ機器の普及の様子をとりまとめた。

わが国のテレビジョン放送は1950年代に開始された。テレビ受信機（白黒テレビ）は耐久消費材の一つとしてその普及度が国民の生活水準を測る一つの目安とされていた。したがって日本国勢図会（以後、図会という。）では「国民生活」の章の〔耐久消費材〕の項にデータが載せてある。なお他の家電品についてもその普及度が記されている。また、「機械工業」の章に〔家庭用電器〕の項を設け、こちらでは家電製品が工業水準の観点から生産高の推移、外国との比較データが輸出入の資料とともに載せられている。

さて、テレビ受信機は1950年代の終りに普及度（保有世帯%）が急速に高まり、およそ5年間で90%に達している。1963年には電気店の店頭のカラートレビ受信機に映る東京オリンピックの競技を人だかり見る光景は普通であった。やがて1960年代の終りに、白黒テレビに遅れること約10年、カラートレビ受信機の普及期を迎えるのであった。普及の速度（普及度の年間上昇率）は白黒テ

テレビ受信機の場合と殆んど同じである。カラーテレビ受信機の普及には、番組面から、大阪で開催された万国博や1972年のミュンヘンオリンピックがバックアップし、技術面では真空管式受信機からオールトランジスタ式受信機への転換が大きく貢献した。受信機はさらに音声多重、省電力、超音波リモコンなどの新技術の付加された機種へと展開していったのであった。

白黒テレビ受信機と時期を同じくして普及したものに電気洗濯機、電気冷蔵庫、扇風機、やや(4～5年)おくれて電気掃除機がある。しかしこれらの製品はテレビジョンとは性格が異なり普及速度はテレビの約3分の2と遅く、また普及度が70%から90%に約8～10年かかっている。

テープレコーダ、ステレオ、ルームクーラなどは、カラーテレビより早く製品になっているのに普及の速度はその4分の1程度しかない。

続いて登場したカセットテレコの普及の速度はカラーテレビの約2分の1で、リール式のテープレコーダに較べて取扱いの簡便さが買われたことがうかがえる。

カラーテレビに遅れること5年の(1970年頃)電子レンジは普及の速度はカラーテレビより1桁近く低かった。これら各製品の持つ特徴が普及度によく反映しているように思う。

1970年後半に入ると、「アフターカラーテレビは何か」とカラーテレビに続く大型商品期待論がなされた。「アフターカラーテレビはやはりカラーテレビである。」といわれたが、やがて家庭用VTR(ビデオテープレコーダ)が大きな期待を背に普及を開始した。当時(1980年)、1986年には普及度50%に達するものと予測されていたが、現状では30%強にとどまっているようである。

最新の86年版の「図会」では「国民の生活」の章はあるがもはや「耐久消費材」の項は無く、家庭用電器については僅か2～3行の記事で済まされている。「機械工業」の章の〔家庭用電器〕の主役はVTRやVD(ビデオディスク…絵の出るレコード)であり、特に輸出への寄与が大である。VDには光学式とVHD方式(静電方式)の2方式がある。音質、画質それにコストなどでお互に売り込みに拍車をかけているところである。いずれの方式がより高いシェアを獲得するか、今後の展開が興味のあるところである。

※『偏読、偏視聴』※

工業化学科 大隅 信行

「偏食」という言葉があります。食物の好き嫌いがはげしかったり、間食ばかりをとったり、美食ばかりをしていると偏食になってしまいます。ヒトはもともと雑食性で、だからこそ人類はここまで発展してきたとも言えます。偏食になると、子供の成長は目にみえて低下し(必ずしも体格のみの成長を意味しない)、大人になったあともガンをはじめとする成人病の予備軍となる確率が高いことが明らかにされつつあります。

ところが、この飽食の時代に若い人の偏食による栄養疾患が問題になってきています。その原因は口当りのよい味覚を強調したインスタント食品、スナック菓子、炭酸飲料、ハンバーガーに代表される外食食品ばかりを食べていることにあるようです。このような若い人の偏食が成人した後の健康にどのような影響を及ぼすかが大きな問題となってきています。

私はこの偏食と成人後の健康問題と同じようなことが、学生諸君の偏読、偏視聴と社会人となったあとの知的能力の間に生ずるのではないかと心配しています。

ここで偏読とは、かなり異論をもつ学生もいるとは思いますが、簡単にいうとマンガ(劇画)か自動車に関する本しか読んでいないのではないかということです。これは食物で言えばお菓子のたぐいです。もちろん諸君にとっても主食にあたる読書は学校の勉強ですが、どうもこの主食も一夜漬というおかずだけでろくに咀嚼もせず流し込んでいる気がしてなりません。

この主食は、将来諸君が技術者となったときに仕事を進めていくうえで必要な情報を消化吸収する器官を形成するための大切な食物です。これをよく噛んで消化しておかないと先行き技術者としての知的作業にかかわることのできる最低の資格条件(すなわち基礎学力)を得ることができません。最近の高専卒業生は一般的にこの能力が大学卒業生と比べて弱いことが、実業界において指摘されています。高専生のこの弱点は学校のシステムからくるもので、簡単にいえば大学入試に相当する受験勉強がないことに起因します。では高専のシステムが6・3・3・4の普通コースに比べ

で劣っているかということ、決してそんなことはないのです。まず、技術者の能力といった場合、それは基礎学力とか学習能力といったもののみをさしません。ただ、アメリカ、ヨーロッパなどのお手本が存在しそれを追いかけていた時代はこの能力を目安にしていればあまり大きな間違いは生じなかった時代でした。しかし、お手本がなくなるこれからは、この能力だけではどうしようもない時代になっています。このような時代に受験勉強のみにうつつをぬかすというのは、食物でいえばおかずなしで一升めしを食べているようなもので決してこれから本当に必要とされる能力を養うものではありません。御飯ばかりではなくて、もっと肉とか野菜とか果物などの多様な栄養を豊富にとって多様な能力を養わなければならないのです。高専は御飯の量を減らして、そのかわりに他の栄養素を摂取させる目的でつくられたものです。ただし誤解のないように言っておきますが、高度な技術社会では、その仕事にたずさわるためにはどうしてもある一定以上の基礎学力が必要なことを肝に銘じておいて下さい。御飯はある一定量きちんととらねばなりません。そこで高専生の現在の状況を食物の譬であらわすと、どうも御飯を減らした分(それもよく噛まないで)、炭酸飲料とスナック菓子ばかりをとっているような気がしてなりません。時代はまさに、個性、創造性、感性といった多様で高度な能力を必要としているときです。単純頭脳労働者の需要が減少しつつあるときです。どうか少しでも間食をへらして栄養のあるものをとるようにして下さい。

題名にもう一つ偏視聴という言葉あげました。これは主にテレビの視聴内容のことをさしています。テレビは現代の社会生活に極めて大きな影響を与えています。私はテレビをみることが読書することに比べて劣っているとは毛頭考えていません。もともとテレビと本とは質の異なる情報伝達メディアであり、その優劣を比較すべき性質のものではないからです。テレビは本では表現できない情報伝達能力を有し、逆に本はテレビにはない情報表現能力を有しています。それなのにテレビをみるのが良くないことのように言われるのは、一つは偏った番組ばかりをみていることに原因があります。テレビ番組にはスナック菓子のような番組が多いのは確かですが、我々の心や頭脳の栄養源となる内容をもつ番組も少なくありません。本を読むのがおっくうならば、まずいろいろなテレビ番組をみて下さい。そして少しでも興味が持てるような内容の番組をみたら、それに関する本

を読んでみて下さい。

※『土木と小説』※

土木工学科 志賀宣郎

“土木と小説の世界”散策(トンネル)という題でビブリアに投稿しているのは7年前、昭和55年の№39号へである。ローテーションからすると私がビブリアに書くのはこれが最後ということになる。そこで“土木と小説”について一応まとめておくこととする。

そもそも“土木と小説”なる話題は昭和51年の土木学会誌10月号に、それまで〔コンクリート製品〕なる雑誌に数回投稿しておられた楠善雄氏が約100冊のリストを発表されたことに始まる。60年の10月号にはさらに約200冊のリストを追加発表されている。そして11月号では原健彦氏が“建設文学選のすすめ”の題で約150冊のリストを発表された。その間、曾野綾子の「無名碑」について、著者と東大の高橋裕教授との対談が載ったり、ゲテの「ファウスト」のあの大土木工事の場面について、東工大の華川教授の所見が述べられたりして、土木の同好の人達の中で良く話題とされるようになって来ている。現在発行中の新体系土木工学、全105巻の最後の土木資料集(未刊)には、成岡昌夫氏がまとめられたリストが載ることになっている。その際、私の資料も参考にされたとかで、その発刊を心待ちにしている。

私自身は、タクラ・テルの「箱根用水」、木本正次の「黒部の太陽」、井上靖の「満ちてくる潮」などに始まって現在まで約500冊、興味はつきることなくますます高まって来ている。内村鑑三の「後世への最大遺物」での“この美しい地球に何も遺さずに死んでしまいたくない”の言葉を自らのいましめとし、カフカの「城」の主人公、測量師Kには、かつて測量隊の一員として田沢湖周辺に乗り込んで行った時の地元の人達とのかわり合いに、Kに同じ仲間意識を感じ、三好達治の処女詩集「測量船」では、カフカの「城」同様、測量の話が一つも出ては来ないけれど、著者自身、士官学校時代に測量学を学んでいた筈と思うと、詩集冒頭の“春の岬 旅のおわりの 鷗どり 浮きつつ遠くになりけるかも”のかもめと測量船とが二つに重なって見えて来たりする。そしてゲテの「ファウスト」の最後の場面、大干拓工事に

ついで、彼のワイマール王国における行政官としての仕事、イルメナウ鉱山の経営、さらに國務大臣としての業績などから、ゲーテはシビルエンジニアの一人であった筈だなど……。最近では、深谷俊明の「あの道、この道」の鉄筋コンクリート船について、現在沈船防波堤として呉の安浦に健在であるという写真を送って下さった大林組の十河茂幸氏とのおつき合い、これも“土木と小説”の取り持つ縁である。

次いで映画、テレビに話を移して見よう。前述の「箱根用水」、「黒部の太陽」の映画にふれたことが土木への道を選んだきっかけとなったという話も良く聞く。最近では岩川隆の青函トンネル工事をテーマとした「海峡」があり、この映画には土木の学生全員が出かけて行った。同じく大プロジェクトの本四架橋物語加藤宣利の「虹よ永遠に」は、テレビでは「愛ありて、夢ありてこそ一四国

島でなくなる日」として、二時間半の大作であった。原作と脚本を比較しながらということも楽しみの一つである。勿論赤川次郎の「バージン・ロード」のテレビでは北海道で大暴風雨の中でのトンネル工事にひかれて、早速買って読んで見たら、主人公の職業は土木とは全く関係なく、しかも舞台が北九州だったのは驚いた。

二十一世紀に向けて、人口問題、環境問題等も土木の範ちゅうにあり、これ等をテーマとした小説もどんどん増えて来ている。我が楽しみはつきることがない。“機械と小説”、“電気と小説”、“工業化学と小説”といった観点から本に親しむのは如何、何年か前、工業化学の小磯教官がこのビブリア紙上で、K・A・シェンチンガーの科学小説「アニリン」をすすめておられた。どんな形でも良い、まず読むことである。そこから何かが見えてくる筈である。

私の読書

※『太陽の子』を読んで※

電気工学科1年 香野奈津恵

沖縄の人々の優しさ。それは、同じ苦しみ、悲しみの中を生き抜いてきたからこそだと思う。本当の苦しみ、悲しみを知っているから、もう、誰にもそんな目にあわせたくないと考えているのだろう。だから、沖縄の人が優しくければ優しいほど、沖縄の悲しみが深いものだと感じられ、何か妙に悲しくなってしまった。

私もふうちゃんも戦争を知らない。そこにどんな深い悲しみが隠されているかわからない。でも、今となったら「戦争を知らない」ではすまされない。私たちは自分から戦争を知ろうとしなければならぬのだ。戦争が終わって、もう、四十一年にもなるが、本当の意味での戦争は終わっていない。ふうちゃんのお父さんのように心に深い傷を負っている人がいる間は。だから、私たちは戦争を知らなくてはならない。どんなにむごいことから、目をそらしてはならないのだ。二度と戦争を起こさないためにも…。ふうちゃんのお父さんのような犠牲者を出さないためにも…。

てだのふあ・おきなわ亭には、沖縄出身の気の優しい人たちが集まっている。何でも相談ができ、一見陽気そうな人ばかりに見えるが、そうではな

い。

「オキナワモンのくせに…」

この一言が心に深く突き刺さり、怒りを爆発させてしまうのである。どうして沖縄の人間はいけないのだろうか。それは差別だと思う。人間は平等のはずだ。しかも、同じ日本人だ。沖縄の人々の受けた悲しみを知らないからそんなことが言えるのだろう。同じ人間、日本人として、恥ずかしいことだ。

私はこの本を読んで、ほんの少しではあるが、沖縄の戦争の悲惨さを知ることができたと思う。「日本のために自決しろ」「日本のために赤ん坊を殺せ」などの言葉は、本当に日本人の口から出たものなのだろうか。赤ちゃんを殺すなどこんな残酷なことがあっていいものなのだろうか。親はその命令をどんなふうを受けとめたのだろう。きっと、気が動転してしまい、冷静でいることなどできなかったであろう。この私にだって、激しい怒りがこみあげてきたのだから…。

本当に生きていることとは、一体どういうことなのだろう、物質的に満たされていることだろうか。私には今まで、戦争のようなつらい体験がない。だから、生きていることの喜びをよく知らない。今の時代が、平和すぎるからだと思う。結局は、ぜいたくなのだ。しかし、その平和の下には、多数の犠牲者がいることを忘れてはならない。そ

ういう人達がいるからこそ私たちは、今、平和な生活を送ることができるのだ。だから、私たちは二度と戦争を繰り返してはいけない。それが、犠牲になった人々へのいちばんの供養だと思う。そのためには、私たちが、戦争の痛みを知らなくてはならない。ふうちゃんのように、どんな残酷なことにも立ち向かっていき、真実を知らなければならぬ。日本は、沖縄の心にふれていくことをしなければならぬのではないだろうか。そうすれば、真の平和の意味もわかってくるだろう。生きていることに喜びを感じ、今の生活が満足するようになるだろう。私は、一日も早く、そのような日が来るのを期待している。

また、沖縄のいろいろな海の色を守ってあげたい。そこには、たくさんの人々の願いがこめられていると思う。それを守ってあげるのが、今の時代に生きている私たちの役目ではないだろうか。

これからの人生は、悔いのないように精一杯生きていきたい。そして、平和な日々を守っていきたい。

※「城の崎にて」を読んで※

土木工学科1年 中村公保

私はこの作品を読んで、はじめに印象を受けたのが筆者が山の手線で、電車で跳ね飛ばされたのに生きて但馬の城の崎温泉にいることであった。ふつうならばとっくに死んでいるはずなのに偶然にも助かった筆者の心持ちはどのようなものであったろうか。私は、筆者と同じ境遇にあった気持ちになろうとしても、死ぬか生きるかの出来事なので、とてもなることができません。むしろ、なれという方が無理かもしれません。

この状況の中で、筆者は、何を考えるのにもみな、自分と照らし合わせて見ている。このような物の見方は、自分が一人きりの時などの見方であると思う。一人寂しく散歩をしている風景は、さみしいけれど、とても情趣があるように感じられる。しかし、筆者は、助かったというのになぜか、死に対して親しみがわいてきてしまう。これは、ひとつのやすらぎを持ちたいためであろう。では、なぜこんな気持ちになるのであろうか。人は誰でも当然のことではあるが死にたくない。自分が危機に陥ったらどんなことをしても、自分を助けるように自分自身で努力する。しかし、本気に自身

だけではどうにもできないときは、人に助けを求めて、助かろうとする。時には、人をつき倒してでも自分の命が危ないとあらば、自分だけはどういう気持ちになり助かろうとするぐらいである。だから人は、どんなことがあっても死のうとは思わないはずである。

しかし、筆者は偶然にも助かった命に、絶対的な別条がないと知らされれば、死に対して親しみなど、持たなかったと私は思う。ましてや、致命傷になりかねない体をもっているのだから、死んだ方がよいと考える筆者の気持ちがとてもよくわかる気がする。自分が目の前にいる人から、生きるか死ぬかの命だなどといわれたら、まさに生きる望みをなくしてしまい、いっそ、こんな気持ちで生きているならといったような気持ちになり、死にたくなるだろう。だから私は、筆者の寂しい気持ちを、いくらかたりのぞいてやりたいくらいだ。

そして、筆者の場所によって見つけ出す、はちや、ねずみ、いもりに対する感じ方、考え方を筆者の現在の愛況と比較したかたちであらわしているところは、とても生と死を考えている人にとっては、しみりさせる場面だと思う。人間の生と死・虫たちの生と死は全くちがうように見えて、実は、全く同じといってよいほど似ていると思う。筆者は、毎日玄関の屋根で、忙しそうに働いているはちを見て、退屈な時間をどのくらいかは、しのいでいる。そんな中で、ある日一匹のはちが死んでいるのを見つけると、筆者は、今まで一生懸命に働いていたはちが、全く動かずにうつむきになって転がっているのに寂しい印象を受けるがなぜか静かな感じを与えられて、虫の歌というものに親しみをもってしまう。同じく、ねずみが川で死にかけそうなのを必死にこらえて、生きようとする場面でも、安らかな歌を前にして苦しみたえて生きようとすることに、恐ささえ感じられ、むしろ苦しまずに死ぬということに親しみをもっている。このようにしてみると、筆者の人間の死に対する親しみと、昆虫たちの死に対する親しみは、みな安らぎを中心として同じことのように思える。共通していることはみな、苦しまずに安らかに死んでいきたいということであるだろう。

筆者は、自分の事故から、おもいもよらぬ光景に出会い、そして、おもいもよらぬ自分の今の姿に、いったいどう考えているだろうか。偶然にも助かった自分に対していったい何ができるのだろうか。

私は、この作品のまとめの感想として筆者に対

していいことがある。それは、なぜ、死というもののばかりに気をとられるのか。致命傷がのこるのこらないは別として、もっと生きるということに情熱を燃やしてもらいたいのだ。偶然に助かった命なら、その前に起こった事故もやはり偶然に起こったものだと思う。

死ななかったことに偶然を感じるのもよいが、偶然に起こった事故もよく考えてもらいたい。そして、この出来事を人生の一つの土台として生きる気力を出すようにしてもらいたいと思う切であります。

※『ガラスのうさぎ』を読んで※

電気工学科2年 須藤隆士

私の両親が生まれた時にはもう戦争は終結していました。

「幼い頃は、毎日満腹に食べることもできなかった。」と、以前聞いた覚えがあります。幼い頃より何不自由なく育った私には、何とと言われても実感がつかめません。そんな状況で育った私には、何を言われても実感がつかめません。そんな状況で育った私には、戦争というものがどういふものなのか想像はできても、それま単なる空想でしかありません。

主人公の敏子は、十二歳の少女で、ガラス工場経営の父と、病弱な母、二人の兄、そして二人の幼い妹達と、戦争のさなか仲むつまじく暮らしていました。

しかし、戦争が長びきだし、父も、二人の兄も徴兵され、二人の妹と病弱な母だけが残ったのです。敏子の母は、敏子を一人前として扱い、何事も敏子に相談し、敏子もまたそんな母のために、懸命に働きました。「お父さんもお兄さんも、お国のためにつくしているのだ。」そんなことを心の支えにして。

しかし、三月十日に行った東京大空襲で、二人の妹とお母さんを失ってしまうという、夢にも思わぬ事態が、敏子のみまだったのです。「死亡。」という確信はありませんが、本の一晩で、本所区の九割六分が灰になってしまったのです。

「お母さん達が死んだ。」そう言われても信じることなどとても出来なかっただろう。

でも、お父さんの作ったガラスのうさぎが、耳はだらっと垂れ下がり、半分以上とけてしまう程

の熱さだったのです。

母と妹達の死だけでも堪え難い悲しみであるのに、更に追い打ちをかけるように悲劇がおそったのです。敗戦のわずか十日前。敏子はお父さんと二人で、二宮の駅で列車を待っていた時に突如急降下してきた、P51の機銃掃射で、目前で父の末期を目撃したのです。「私が死んだら、お父さんやお母さん達のお暮参りは誰がするの。私はどんなことがあっても生きなければ。」とすぐに考える敏子の強さ、そんは敏子のすばらしい点ではないだろうか。

もっと早く戦争をやめていれば、いや戦争などしなければ、敏子の家族はもちろん、多くの人々が命をなくしはしなかったのです。

戦争は、悲しみ、恐怖といっただれもが巡り合いたくない事を含むものなのです。平和を心から望み、世界の永遠の繁栄を願うところです。

※『変身』を読んで※

工業化学科2年 横田 郁

この本を読んでまず感じたことは、始めから終わりまで、不気味な空気がただよっていたということである。その空気は恐怖に滞っていて、悲しみさえ感じられた。

主人公グループ・ザムザは毒虫に変わってしまったことで、社会の歯車からこぼれてしまい、本の中では、異様な生物というふうなのだが。考えて見ると、彼は正常にもどったのかもしれない。社会は常に流れ個人は社会の一部品のようにってしまった現代において、毒虫という形で、本来の姿に帰ったのだらうと思った。しかし、それは、社会において、いけないことのようにだ。それは、今まで生きてきたぼくにも、すこしわかる気がする。目覚めることは危険なのだ、どちらが正しいのかはよくわからないが、もし今、自分本来の姿にもとれば、世の中の落ちこぼれということになるだろう。世の中では、自らをぎせいにして、社会に自分を売り渡すことが正常なのである。またそうしなければ生きるのが困難になるだろう。

この本では、グレゴールの家族が世の中にあたるのだらう。家旅は彼をじゃまにし、追い出そうとする。今もしだれかが自分本来の姿にかえれば、それは、わがままで、集団生活のできない人間として、しまいには異常者として、迫害され、ジャ

マにされることだろう。いったいどちらが正しいのだろうか、自分を捨てることは悲しいと思う、しかしそうしないことには、生きることも難しい。そこであんまり考えると頭が痛くなる。一人がこう考えてもはじまらないだろうから、もう考えないことにしよう。どうにかうまく生きていこうと思った。

※『必死の力・必死の心』 を読んで※

機械工学科3年 堀江 恭史

最近この本を読みいろいろと考えさせられました。この本の著者の黒崎健時氏は格闘技の世界に生きてきた人ですが、その闘いの中から生まれた事は人生においても通じる部分がたくさんあります。それは人生もやはり闘いだからなのでしょう。

人間は極限に追いこまれると想像もつかない力を出すそうです。昔から“火事場の馬鹿力”などと呼ばれていますが黒崎氏はこれを“必死の力”と呼んでいます。そしてこの時その力の根源となる心の状態を“必死の心”と言っています。黒崎氏は若い時、自分の限界を知りたいと思い、さまざまな苦行を行いました。自分から極限に追いこんだのです。意地っ張りて負けることが嫌いだった性格がそうさせたのでしょう。その苦行のどれもが一般の人ではとてもできないような内容です。主なものをあげてみますと、穴の中に生き埋めになる修行、線香を腕に押し当てて燃やす苦行 八十二日間の山ごもり とどれも物凄いものばかりでした。そんな苦行をする黒崎氏は、まわりの者にあいつは気が触れたんじゃないかと思われたそうです。その中でも一番苦しいのは飲まず食わずの行だそうです。人間は断食は七十日できるが飲まず食わずでは、八日間が限界らしいそうです。黒崎氏は、ほとんど限界の一週間しました。そしてその断食、断水を経た骨と皮だけの身体で飛行機のタイヤ三本を乗せた荷車を引くことに挑戦しました。それは馬に引かせる荷だったので相当な重さです。それをなんと動かすことができたそうです。人間としての体の限界を越えているのだから車を動かしたのは“必死の心”であったのだろうと黒崎氏は言っています。人間が追いつめられた時に出す力というのは物凄いものだとあらためて感じました。

この様に人間は凄い力を出す可能性を持ってい

ます。しかし追いこまれた時、ギブアップしてしまえばそれで終わりです。“必死の力”を出すためには、逆境を乗り越える根性を持っていなければなりません。黒崎氏のジムは「地獄道場」と呼ばれていました。その名の通りトレーニングは、とても苛酷でした。黒崎氏の格闘技に対する姿勢がそうさせたのです。この苛酷な練習によって“必死の力”を生み出す強い精神力が身に付くのです。しかし、そうなるのは生やさしいことではありません。

黒崎氏は、私たちの生活のなかには、あまりに“必死”になることが無さ過ぎると言っています。現在日本は豊かになり生きていくのがやっとな人はほとんどいないと思います。それに平和な世の中なので普通の人には「いつ殺されるか」などと考えなくていいので生きることには“必死”にならなくてもすみます。その点では良い世の中になったのですが、黒崎氏はこれに甘えてはいけなと言っています。“必死”になることが少なくなった今、このまま行けば“必死”になることを忘れ、安逸な生活にひたり切って何の進歩もない、あるいは自分に振りかかった危険を自分で取りのぞくことさえ出来ない人間ばかりになってしまうのではないかと黒崎氏は心配しています。現在の日本が豊かになったのは、敗戦後の焼け野原の中から、人々が“必死”になって生きたからです。これも“必死の力”でしょう。“必死”にならなければ進歩しないのです。

最後に、黒崎氏は“必死”になることで自分の可能性を見出すということを知って欲しいと言っています。この本を読んで人間の可能性は、とても大きいということを知りました。これからの人生“必死”になることを忘れないで生きたいと思いました。

※ノックの音が※

工業化学科3年 筧崎 雅充

この本は全十五編の短編集である。

まずこの本で面白いところは、すべてのストーリーが「ノックの音が」で始まることである。始まりが統一されている点と場所が室内に限られるという点で作品全体がまとまっている。作者は室内だけで完結する形式が好きなのであり、それは他の作者とちがった特色の一つであるといえる

と思う。また、始まりは同じだが内容はバラエティーに富んでいて面白い。作者はこの他にも多くの短編集を書いていて、その数は千編以上といわれるが、これだけの数の作品を書くことができたのは、やはり作者の才能であろう。作者はアメリカのSF短編とは違った作風をつくり出している。彼の作品はすべてが新鮮で、過去のを今読んでみてもその新鮮さは変わらない。ここでも作者の才能をうかがうことができる。

短編集の良いところは、話が短いのでちょっとした時間に読むのに適するという点である。自分は長編などを読むと、往々にして中途になりがちである。その理由はやはりその作品の終わりがなかなか見えないところと、自分のあきっぽいところにあると思う。その点短編なら、あきっぽい自分も、一つの話が短いので、読み終わると次の話が読みたくなるというように芋蔓式に読むことができる。そのようなことから、自分には短編が向いていると思う。これは自分ばかりでなく他の人にも同じことがいえるだろう。

最後に作者は、短編より長編の方が楽だといっている。それは、風俗を書いてふくらませられるからだという。それなのになぜ、短編を多く書いているかという点、作品は、風俗の部分から古びてゆくの、風俗の加わらない短編の方がいつまでも新鮮さを保つことができるということらしい。これで彼の作品がなぜ新鮮なのか、理由がはっきりしたわけである。

自分はこの作品を通して、短編集の良さや面白さを知り、これからも多く読みたいと思っている。また、短編を読んで読書意欲が湧いた時は、中編や長編を読んでもみるのもいいことだと思っている。

★『ミヒャエル＝ハンデ』を読んで★

電気工学科5年 藤 沢 英 樹

児童文学作家、ミヒャエル＝ハンデが“モモ”に続いて描いた、この“はてしない物語”は、そのタイトルの様に、はてしなく続いていきます。

内容はというと、一人の内気で孤独な少年が、偶然手にとった本を読んでいくうちに、いつの間にか、その本の世界へと入り込んでしまって、様々な冒険をする、というものです。映画“ネバーエンディング・ストーリー”の原作なので、御存じの方も多と思います（もっとも映画の方では、原作の半分のエピソードしか映像化していません

が）。

この物語には、はてしなく続くというテーマのため、いくつかのキーワードがあります。一つは、“赤金色の表紙の本”で、もう一つは“アウリン”というメダルで、そのどちらにも、“互いに相手の尾を咬んで楕円につながる明暗二匹の蛇”が描かれています。そしてこの蛇こそが、はてしなく続く物語そのものを表しているのです。

主人公の少年、バスタアンは、本の中の世界へ入り込み、その世界を自分の思い通りの“物語”として、造り出していく力を得ます。そして、いつしかその力に自惚れ、その世界を自分のものにしようと考え、その考えを実行しようとします。独裁者の様に結局、それは失敗し、バスタアンは座折しますが、親友の助けによって立ち直り、現実の世界へもどることが出来ます。

作者、ミヒャエル・エンデは、この物語を通して一人の少年の成長と、人間の心の中にある善と悪、そしてその悪に振り廻される人間の愚さを描いています。悪の道へ入り込んだ人々は、そこに口を開ける罫に捕えられ、永遠に苦しむ。その様子が実に象徴的に描かれていて、考えさせられるものが多くあります。

このようにエンデは、様々な事を語りかけていますが、それを児童文学の、それもファンタジーという形で描いているところにこの本への親しみやすさがあります。

妖精、小人、巨人、魔女、竜、など異世界の様々な住人達が入りかわり立ちかわり、読者の前に現われて、退屈させられません。そして読者の目はいつの間にかこの本の中へ入って行き、バスタアンと共に冒険の旅へと出発します。

この物語は、大人のための児童文学なのです。

★『成吉思汗の秘密』

—高木 彬光著—★

土木工学科5年 石 井 政 宅

歴史のイフ（もしも）というものがある。これはどういうことかという点、例えば、織田信長がもし本能寺で明智光秀に討たれていなかったら、その後の歴史はどう動いていたか、というようなことや、はたまた、関ヶ原の戦いにおいて、もし石田三成の西軍が勝っていたら、その後天下人になったのは誰であろうか、というようなことで代

表的に語られるものである。

以上に挙げたような、十分に結果が逆転することが可能で、なおかつその後の歴史に大きな影響を及ぼしそうな歴史のイフというものは、様々な時代に数多く存在している。そして、それらの逆転の日本史を眺めていくと、実に大きな可能性を秘めた人物に出会うことになる。それが源義経である。

義経は、歴史学の一般の評価においては、あまり良い評価をうけているわけではない。つまり、その天才的な軍略に反して、あまりにも政治的能力が欠如していたという評価である。しかし、義経の後半生には、それらの評価のみで義経を処理してしまうにはあまりにも惜しい、いくつかのイフが挙げられている。一つには大物浦での遭難で、軍勢が離散してしまったこと。兄頼朝に追われていた義経が、もしもここで遭難していなかったならば、豊後国を中心に再挙することができたとされている。そして二つには、奥州藤原氏の待つ平泉まで逃走することができたものの、養父ともいうべき藤原秀衡が死去してしまったことである。もしも秀衡があと5年長く生きていたならば、平泉政権・十七万騎の兵を従えた義経が、鎌倉政権と対峙することは確実なことだったとされている。中でも、この二つ目のイフは義経の明暗を完全に分けたものとなり、結局義経は、秀衡の後を継いだ子泰衡によって衣川の館を襲われ、自刃するという、無惨な最期をとげるのである。そして、義経はこれら後半生のツキのなさ故に「悲劇の武将」として後人の人気を博し、歴史的評価など御構いなく、その人生を後人によって、より劇的なものに脚色されていくのである。

つまり、義経は、人々が潜在的にもつ歴史のイフが育て上げた英雄ともいえるのだが、それにふさわしい伝説が義経には残っている。それが義経が蝦夷に逃れたという義経北走の伝説であり、果

てはこの「成吉思汗の秘密」で紹介されている「義経＝成吉思汗同人説」なのである。

一般的には、義経に生きていてもらいたいという人々の願望がこれらの伝説を生み出したのだ、というようなことが言われているが、この小説を読む限り、この同人説は、「伝説」と書いてしまうことがおこがましく感じられてくるぐらいに信憑性を帯びてくるし、また、単なる伝説と言いきってはいけない背景があったこともわかるのである。

ストーリーは、高木彬光の推理小説では御馴染の名探偵・神津恭介が主人公となって、この義経＝成吉思汗という一人二役のトリックを推理してゆくという形をとっており、過去四度あった義経＝成吉思汗論争の賛否両論を集大成したものとなっている。(つまり、これが単なる伝説と言いきってはならない背景となっている。)

しかし、現在どの教科書を読んでも、成吉思汗は義経である、と書かれていないことからわかる通り、残念ながらこの小説においても、この同人説を完全に決定づけるような物的証拠はげられていない。が、この同人説を完全に否定できるような証拠もまた挙がっていないことも読み取れる。つまり、そのような確実な証拠というものは、源平の時代から八百年を経てしまった現代では、もう掘り返すことが不可能であり、あとはこの小説で挙げられている数々の状況証拠とその否定説、そして神津恭介の推理という形で述べられている作者独自の視点を、読む者がどう判断するかにかかっているのだ。

ただ、この小説は、同人説肯定派の立場から書かれてあること(当然そうでなければこの小説はおもしろくならないのだが)、結末の推理があまりにも劇的な印象を与えることなどから、この小説を読んだ人の六割がたは、この同人説を信じるができるようになるだろうと思う。

後輩に勧める本

機械工学科

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
会川哲也	好色一代女	井原西鶴	岩波文庫	女をさらに好きになる
安藤忠信	一人だけの軍隊 オートバイ	ディヴィッド・マレル	ハヤカワ文庫 モーター マガジン社	映画「ランボー」の原作 バイクを楽しみたい人へ
伊藤孝行	サイバネテックスの世界	エルラストリギン ペ・グラヴェ	講談社	人工知能は難しい
岩角親敬	項羽と劉邦(上・中・下)	司馬遼太郎	新潮文庫	興奮します
及川晴夫	太陽の世界	半村良	角川文庫	
大槻直樹	風呂上がりの夜空に	小林じん子	講談社	よく読めば3倍笑える
岡洋一	サバイバル・ファクター VZONE バイオテクノロジー	スタンリー・A・ ブランパー グウィン	サンケイ出版 少年出版社 講談社	
小野道夫	男おいどん うそつきロボット 宇宙戦争	松本零士 アイザック・ アシモフ H・G・ウェルズ	講談社 ハヤカワ文庫 ハヤカワ文庫	
折内照雄	紳士同盟	小林信彦	新潮文庫	ウソつきがスキです
加藤邦明	梅は匂い人は心			
加藤信一	ノックの音が	星新一	新潮文庫	オモシロイデス
金成守康	ブンナよ、木からおいてこい	水上勉	新潮文庫	
亀岡勉	人はなぜ子育てが下手か	戸川幸夫	講談社	
川崎寿紀	からだ雑学事典 JAF・MATE	佐伯誠一	日本実業出版社 JAF・MATE社	話のタネになる ためになる

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
小池次雄	Horizon of Try	北方謙三	講談社	よく読まれています
今野万寿雄	小娘のミッドナイト	桑原譲太郎	集英社	
斉藤正人	ドライマティーニが1をさく	片岡義男	角川文庫	エッチです
柴野正道	4 SPIRITS	えだまつかつゆき	日本画報社	
菅波正幸	ロケット・ファイター	M・ソイグラ	朝日ソノラマ	W.W.IIの実話
	アンドロイドは電気羊の夢を見るか?	P.K. ディック	ハヤカワ文庫	
	共同幻想論	吉本隆明	角川文庫	理論武装派へ
東條幸一	旅—温泉大百科—		日本交通公社	温泉ギャル!
富澤秀光	とらわれたスクールバス	眉村卓	角川文庫	SF!
	Oh!MZ		日本ソフトバンク	パソコンの本
新妻誠司	CARBOY			チューンの好きな人に
新妻禎智	EV.Cafe'(超進化論)	村上龍一	講談社	現代思想の啓蒙書
	La gaya scienza (GS/楽しい知識)	浅田彰他	UPU	思考のレクチュール
蜂谷勉	NEUROMANCER	William Gibson	早川書房	エレクトリックage
	源氏物語	紫式部	新潮出版	うん!ロマンス
星正義	狭き門	ジッド	新潮文庫	
	若きウェルテルの悩み	ゲーテ	新潮文庫	未成年者のうちに読むべし
穂積博輝	C.W.ニコルの青春記	C.W.ニコル	集英社	快感
	国境をこえるプロフェッショナル	森拓之	あすなろ書店	
	武将列伝	海音寺潮五郎	文芸春秋	
松崎聡	監督と野郎ども	川上健一	集英社	プロ野球ファン必見
山内美知男	伊達政宗	山岡荘八	講談社	タメになりませー!
	右曲がりのダンディー	一条正行	講談社	男がわかる本
力丸洋之	首都消失	小松左京	角川文庫	おもしろい
吉田宣宏	恐怖の谷	コナン・ドイル	創元推理文庫	ドイル長編中のベスト
	時の魔法使い	原田知世	角川文庫	崇拜している
	論語	具塚茂樹訳	中公文庫	人生のためになる

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
吉田安彦	デキゴトロジーNo.1～6		新潮社	日本は平和だ！
	十年先を読む発想法	西澤潤一	講談社	別世界
	コンタクト	カール・セーガン		マジな内容
渡辺英司	エンジンの設計製図	小熊正	パワー社	
渡辺守	青が散る	宮本輝		よみたきゃよめ

電気工学科

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
相田亨	入門 洋酒とカクテル		サントリー	読むだけです
	カーグラフィック		二玄社	
飯塚俊三	三国志	横山光輝		おもしろい
猪狩謙一	魔獣狩り	夢枕獯	祥伝社	おもしろい
	北の土龍	石川サブロウ	集英社	絵を描きたくなる
	アドルフに告ぐ	手塚治虫	文藝春秋	火の鳥よりおもしろい
猪狩真一	ドグラマグラ	夢野久作	角川書店	カルト、人格変換実験
	南総里見八犬伝	曲亭馬琴	河出書房新社	陰陽星辰、仏教的秘事
	不思議の国のアリス	ルイス・キャロル	講談社	L・S・Dトリップ
榎内康浩	IN THE EMD とどのつまり…	押井守 森山ゆうじ	徳間書店	それは、とどのつまり…
	Z80プログラミング デザイン	新沢勉	秀和システム トレーディング株	Z80ユーザー必見！！
	銀河鉄道の夜	宮沢賢治	新潮文庫	とにかく いい！
大和田俊光	あるときは闇の砂漠	玉井洋造	立風書房	
	ぼくがぼくであること	山中恒	角川書店	小学生5～6年向
鎌倉拓也	翔んでる警視	胡桃沢耕史		いつよんでもよい
川名守	翔んでる警視	胡桃沢耕史		
菅野敬三	百	色川武大	角川書店	
草野真理子	哀愁の町に霧が 降るのだ	椎名誠	情報センター	
	上			
	中			
	下			

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
久保木秀人	センサ工学の基礎	山崎弘郎	昭晃堂	
斉藤昌仁	電気武者伝説		シンコー ミュージック	
桜井まさみ	ハート・カクテル	わたせせいぞう	講談社	おもしろいです。
佐藤勝利	オーバーザトップ	ジョエル・ドン ・ハンフリーズ	角川文庫	アームレスリングに男 の大きな夢をかけて!!
下遠誠	ハート・カクテル (I~IV)	わたせせいぞう	講談社	おっしゃれー
菅波寿	21歳の父	三浦綾子	新潮社	泣いて
	気分はダボダボソース	椎名誠		笑って
	竜馬が行く	司馬遼太郎	講談社	大人になった
鈴木修	塩狩峠	三浦綾子	新潮文庫	キリスト教信者の純愛物語
鈴木守之	演算増幅器の設計			何もわかりません
鈴木義博	バタアシ金魚		講談社	JOHNNYが燃えた
高橋修	羊をめぐる冒険(上・下)	村上春樹		おもしろい
	風の歌を聴け	〃		〃
	童夢	大友克洋		〃
武田哲也	演習微分積分	寺田、坂田、斉藤	サイエンス社	微分積分いい気分!!
	わかるドイツ語	常木実		わかる!ドイツ語
	リニアIC規格表		CQ出版社	素子一つでアンプがで きる。
田中真生	ビブリア		福島高専	悔いの多かった私の読書
田畑範和	麻雀放浪記	阿佐田哲也	角川文庫	永遠の名作
生田日陽一	菊と刀	ルーズ・ベネディクト		難しいけど読むべき
仁田尚子	三毛猫ホームズシリーズ	赤川次郎		どの本も全部おもしろい
	占星術殺人事件	島田荘司		以外な結果が…最高!
根本一夫	わしらは怪しい探険隊	椎名誠	角川文庫	
長谷川昭一	走れメロス、新樹の言葉 他9編	太宰治	旺文社文庫	おちこみのわかる人に
	きみはノルン	小山田いく	秋田書店	マンガは人生の援護射撃
	人類ネコ科	みず谷なおき	小学館	
福田哲	愛と死、友情、馬鹿一	武者小路実篤	新潮文庫	興味深い

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
藤 沢 英 樹	カムイ伝	白 土 三 平	小学館	歴史の観念が変わる これをみないと死んでしまう 気分はもう最高
	出席簿	本校各先生方		
	麦ちゃんの キタ・セクスアリス	立 原 あ ゆ み	集英社文庫	
古 川 勝 也	翔んでる警視	胡 桃 沢 耕 史		
古 市 英 幸	天声人語		朝日新聞社	
辺 見 充	ドライマティーニが口をきく	片 岡 義 男	角川文庫	
松 崎 敏 栄	彼のオートバイ 彼女の島	片 岡 義 男	角川文庫	日本の大学生は勉強しない。
三 浦 武 治	ペリカンロード	五 十 嵐 浩 一	少年画報社	
	ジャリン子チエ	は る き 悦 巳	双葉社	
柳 修 次 郎	ぼくらの時代	栗 本 薫	講談社	推理、続編“ぼくらの 気持”もある。
	わが街角(上・中・下)	早 乙 女 勝 元	新潮社	文学
	20億の針	ハル・クレメント	東京創元社	SF、続編“一千億の針” もある。
矢 吹 和 彦	ターボ時代のF1	NiKi Lauda	二玄社	
渡 辺 百 人	めぞん一刻	高 橋 留 美 子	小学館	下宿人のバイブル
	実践ドライブ・テクニック	矢 原 秀 人	講談社	ためになる
	現代の航空戦	ビル・ガンストン	原書房	わかりやすい

工業化学科

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
赤 津 誠 一	こころ	夏 目 漱 石		名作です
	AKIRA I II III	大 友 克 洋	講談社	私は好きです。
	童夢	〃	双葉社	好き
赤 塚 政 司	mono マガジン			おもしろいモノや役立 つモノがいっぱいのっ ている。
安 島 岳 彦	フランス軍資金を奪え	ポーターヒル	早川書房	おもしろい
	ケインとアベル (上・下)	J.アーチャー	講談社	とにかく読んでみてく ださい。

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
安島 岳彦	ロスノフスキ家の娘 (上・下)	J・アーチャー	講談社	「ケインとアベル」の続編
安藤 満理子	いちごをつぶしながら	田 辺 聖 子		女の子に読んでほしい本です。
	魚は水に女は家に	”		
	返事はあした	”		
石 村 隆	Newton	竹 内 均	教育社	ためになる
	間違いだらけの AT車テクニック	黒 沢 元 治	講談社	スポーツ・ドライビング するために
猪 狩 明 文	こんなクルマは買って はいけない	山 田 昇	早稲田出版	ためになる
猪 狩 孝 則	ノストラダムスの 大予言	五 島 勉	祥伝社	おもしろい
	量子化学入門		講談社	ためになる
石 井 慎 二	雨やどり	半 村 良	講談社	気軽に読める。
	手鎖心中	井 上 ひ さ し	文芸春秋社	感動できる。
井 波 ア リ サ	なぜか笑介	原 日 出 夫	小学館	社会人のライフ・マニュアル
	椿姫			女の子にぜひ読んで もらいたいな。
	若い女性に贈る12章			
今 福 功	潮騒	三 島 由 起 夫		感動本
	「問題解決」の基本が わかる本	国 司 義 彦	PHP研究所	ためになる。
江 尻 政 彦	天国にいちばん近い島	森 村 桂	角川書店	映画と全然ちがう。
	飛鳥へそして まだ見ぬ子へ			子を思う親の気持ちが こめられている本です。
大 友 忠 男	風立ちぬ	堀 辰 雄		
	美しい村	”		なかなか笑える
大 森 美 登 里	美味しんぼ		小学館	マンガだと思ってバカ にするな
	青葉茂れる	井 上 ひ さ し		誰でも一度だけ経験す るのよ。
	フェビアの初恋			まるで浜田省吾の世界
小 田 和 広	白き如女地		旺文社	泣ける。
	二都物語	デ ィ ケ ン ズ	新潮社	えらい。

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
小田和広	サード・ガール	西村しのぶ	スタジオ・シッフ	笑える。
小野晴市	上海サプライズ	トニー・ケンリック	角川書店	うっ。
	実験人形、 ダミー・オスカー	小池一夫	スタジオ・シッフ	私は超人間だ。
富岡博隆	大東京生活貧乏 マニュアル		講談社	貧乏人必読
岡部正直	ホリデーオート			ハイコスト・パフォーマンス
	S.S.M.O.物語	バチストーン		女性より男性に読んでほしい。
加藤健司	オリエント急行 殺人事件	アガサ・クリスティー	新潮社	感動巨編
	メソポタミア殺人事件	”	”	
	三幕殺人事件	”	”	必要にむずかしい。
河村勝	Chemical Abstracts		A.C.S.	これを読めば化学者になれる。
	翔んでる警視	くるみざわこうし		おもしろいと思う。
	久米宏の金曜チェック	N.S. 制作班	角川書店	小宮さんが好きという方へ
黒木勝仁	輝ける碧き空ノ下で	北杜夫	新潮社	南米移民の話
	北杜夫全集1~15	”	新潮社	2万ぐらいで買える。
甲高誠	初級革命講座飛龍伝	つかこうへい		馬鹿は読むな。
佐藤千夏	ジャンヌダルク 処刑裁判	高山一彦(訳)	白水社	宗教って怖い。
	聖女ジャンヌと 悪魔ジル	トウルニエ	”	”
	ライ麦畑でつかまえて	サリンジャー	”	思春期の方におススメ…。
四家聖一	サッカー・マガジン			燃える。
鈴木利広	白の十字架	森村誠一	講談社	なかなか…。
	光の丘療護園千人の父	真尾悦子	新潮社	感動。
鈴木学	風呂上りの夜空に	小林じんこ	講談社	もっえっちゃ〜ん!
	獄門島	横構正史	角川書店	日本人!
	コージ苑	相原コージ		必見!
田辺真一	青が散る	宮本輝	文芸春秋社	青い時が輝いている。
	ハートカクテル	わたせせいぞう	講談社	憧れの世界
	Hot Dog	いろんな人	”	よくばりの人にいい。

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
丹野寿美子	化身	渡辺淳一	集英社	素敵
	愛のコラージュ	落合恵子		自立した女の生き方
	午後の恋人	平岩弓枝		処女としてあこがれます。
登藤由美	女の一生	モーパッサン	新潮社	考えさせられる本だな!
	人間万事寒翁か丙午	青島幸男	"	なかなか、おもしろいヨ!
	化身	渡辺淳一	集英社	感動!感動!
西田恵	ナポレオン狂	阿万田高	講談社	おもしろい。
長谷川茂	ちいさいモモちゃん	松谷みよ子	講談社	
	でかでか人とちびちび人	立原えりか	"	
樋口孝典	アレグロ・ヴィバーチェ	スベル・M・A		アップ・テンポ
	いまどきのこども	玖保キリコ	小学館	僕はキリタくんに似ている。
馬目康彦	フェル・アルバム	中林		ふえる。
馬上伊三雄	私の人生を決めた一冊の本		三一書房	大志を抱く若者は一読。
	実録 はね駒	磯村英一	開隆堂	職業婦人としての生き方に感銘。
	大学で、いかに学ぶか	増田四郎	講談社	大学の在り方が、よく書かれている。

土木工学科

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
赤井文人	オッス空手部		集英社	
阿部則元	伊達政宗(1)~(6)	山岡荘八	講談社文庫	ためになる
	ロマンチック・スペシャル	正木ノン	集英社 コバルト文庫	すばらしい
猪狩伸之	北斗の拳	武論尊/原哲夫	集英社	世紀末救世主伝説
石井政宅	霸王の家	司馬遼太郎	新潮文庫	家康の実像に迫る
猪股朋弘	田辺聖子の 小倉百人一首	田辺聖子		今度、読みたいと思う
	女歌	中島みゆき	新潮社	知る人ぞ笑える
	20歳の原点	高野悦子	新潮文庫	20歳の誕生日に

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
今井智一	首都消失 伊達政宗(1)~(6)	小松左京 山岡荘八	徳間書店 講談社文庫	
大平正	ライ麦畑でつかまえて	J.D.サリンジャー		一生に一度は読もう
岡部睦	缶ビールのロマンス	片岡義男	角川文庫	心のゆとり
小野吉久	ブッダ 点と線	手塚治虫 松本清張	潮出版社 新潮文庫	仏教徒へ
小山泰正	高熱隧道 美味しんぼ	吉村昭 雁屋哲	新潮文庫 小学館	大変ためになる
菅野文雄	そして誰もいなくなった	アガサ・クリスティー	ハヤカワ・ ミステリー文庫	
杵淵純一	伊達政宗(1)~(6)	山岡荘八	光文社文庫	
黒澤勝敏	新・翔んでる警視 日本語 あすなろ物語	胡桃沢耕史 金田一春彦 井上靖	廣済堂文庫 岩波文庫 講談社	知識が広がる！ 日本語を見直す一冊 おもしろいよ！
黒澤秀実	潮騒 伊達政宗(1)~(6)	三島由起夫 山岡荘八	新潮文庫 光文社文庫	
斎藤健一	そして誰もいなくなった 三国志(1)~(8)	アガサ・クリスティー 吉川英治	ハヤカワ・ ミステリー文庫 講談社文庫	最高の異色作 感動の大河ロマン
斎藤春樹	人間革命 次郎物語 青春の門	池田大作 下村湖人 五木寛之	聖教文庫 新潮文庫 講談社文庫	読みなさい おもしろい おもしろく読みやすい
酒井謙一	塩狩峠 徳川家康	三浦綾子 山岡荘八	新潮文庫・ 新潮文庫	
佐久間善勝	秘密の花園 女性画家列伝 死んでもともと	松本隆 若桑みどり 菅原義道	新潮文庫 岩波新書 三笠書房	いい詩集 女性の画家もいる 心が広がる
佐藤世一	おいにい	とんねるず		あなどれない一冊
佐藤良一郎	ゴルゴ13	さいとうたかお	リイド社	知識が広がります

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
佐藤良一郎	星へ行く船	新井素子	集英社 コバルト文庫	ロマンチック・SF
鈴木和夫	戦争と平和(1)~(4)	トルストイ		これが世界の心だ
	源義経	村上元三	朝日新聞社	これが日本の心だ
鈴木基彦	土木学会誌		土木学会	土木技術者必見
	久米宏の金曜チェック	テレビ朝日		好評発売中
鈴木由起彦	ENR (Engineering News-Record)		ENR	これ位は読めなくちゃ
高橋幸太郎	砦に拠る	松下竜一	筑摩書店	土木を考えさせられる
	孤高の人	新田次郎	新潮文庫	人間が強くなる
	徳川家康	山岡荘八	新潮文庫	人生観が変わってくる
高橋喜孝	湘南暴走族	吉田聡	少年画報社	純心な少年達の物語
	初恋	ツルゲーネフ		人生観が変わってくる
	高速走行テクニック	星野一義	講談社	2速で100km/h
田中博文	無用な知識の本	ウェブ・ガリソン	ワニ文庫	
	妻をめとらば	柳沢きみお	小学館	
寺島徹	悪名	今東光	新潮文庫	
	男の作法	池波正太郎	新潮文庫	男を磨け!
中島賢一	夜の光芒	黒岩重吾	角川文庫	
	空蠟の街	西村寿行	角川文庫	
	落差	松本清張	角川文庫	
橋本達也	カディスの赤い星	逢坂剛	講談社	
林聡宏	エリア88	新谷かおる	小学館	戦争はいやだ
平子哲央	されどわれらが日々	柴田翔		青春している人、一読
	3/4(よんぶんのさん)	ほんまりう	竹書房	
古川賀也	西洋史	保坂栄一	現代大学双書	学びやすいと好評!
星広行	Dr.クマひげ		講談社	手がはやい
前田盛夫	私の快樂旅行		ワニBooks	正しい恋愛の仕方
	奇岩城	モーリス・ルブラン		A.ルパンの紳士ぶり
	ジャン・クリストフ	ロマン・ロラン		ベートーベンを越えろ

先輩の氏名	書名	著者名	発行所等	短評
山野 辺 豊	真実一路	山 本 有 三	新潮文庫	
吉 田 重 美	フィフティーン・ラブ	堀 内 真 人	講談社	テニスファン必読
	後世最大遺物	内 村 鑑 三	岩波文庫	就職前にぜひ！
吉 田 広 明	宮本武蔵	吉 川 英 治	講談社文庫	感動の嵐、武の極限
	野獣死すべし	大 藪 春 彦	角川文庫	ハード・ボイルド
	キャバレー	栗 本 薫	角川文庫	音楽好きの人には最適
渡 辺 孝	太郎物語			
	青が散る			
	めぞん一刻	高 橋 留 美 子	小学館	
渡 辺 真 澄	男の美学	土 岐 雄 三	三笠書房	人生の勝負どきを知る

※ 昭和61年度 卒業研究 一 覧 ※

◆ 機 械 工 学 科

研 究 課 題	学 生 名	指 導 教 官
ステンレス鋼の熱拡散率の測定	川崎 寿紀, 齊藤 正人	佐 藤(新)
ステンレス鋼の低温における非定常熱伝導に関する研究	安藤 忠信, 金成 守康	柴 野(正)
銅めっき応力測定法の感度について	伊藤 孝行, 穂積 博輝 渡辺 英司	佐 藤(顕)
ガソリン-メタノール混合燃料の燃焼過程	折内 照雄, 新妻 誠司	窪 田
ガソリン-メタノール混合燃料の圧縮行程の特性	今野万寿雄, 渡辺 守	〃
ボルテックスポンプに関する研究	小野 道夫, 新妻 禎智	中 山
管内流れの損失について	星 正義	〃
有限要素プロセッサの作成	岡 洋一, 東條 幸一	淡 路
J積分による応力拡大係数の有限要素解析	大槻 直樹, 松崎 聡 吉田 宣宏	〃
求人就職管理ソフト開発	富沢 秀光, 吉田 安彦	石 垣
知能走行ロボットの制御	加藤 邦明, 力丸 洋之	〃
ロボットハンドの制御	亀岡 勉, 山内美知男	〃
道路沿線における騒音の伝搬について	会川 哲也, 蜂谷 勉	渡 辺
音響インテンシティの計測	加藤 信一	〃
木工用丸鋸の切削騒音とその対策	岩角 親敬	〃
マイコンによる境界要素法の研究	及川 晴夫, 小池 次雄 菅波 正幸	佐 藤(憲)

◆ 電 気 工 学 科

研 究 課 題	学 生 名	指 導 教 官
拡散方程式からの拡散シミュレーション	古川 勝也	岩 間
拡散モデルからの拡散シミュレーション	菅野 敬三, 仁田 尚子 根本 一夫	〃
PCM磁気録音用プロセッサの試作とその特性	鈴木 修, 辺見 充	渡 辺(喜)
音声合成装置用BPFの設計とその特性	鎌倉 拓也, 鈴木 守之	

研 究 課 題	学 生 名	指 導 教 官
水晶発振器の設計と製作	菅波 寿	山 崎
デジタルフィルタおよび周辺回路の設計	高橋 修	〃
負性イミタンス変換器によるジャイレータおよびフィルタの製作	長谷川昭一	〃
PLL ICを用いたPM検波器	藤沢 英樹	〃
放電時の電磁波測定によるトラッキング破壊の検討	猪狩 真一, 武田 哲也	鴨 沢
有機絶縁材料の屋外曝露試験	草野真理子	〃
IEC(Publication58)による有機絶縁材料のトラッキング破壊	桜井まさみ	〃
熱的特性測定によるトラッキング破壊の検討	生田目陽一	〃
汚損液流路を限定した場合のトラッキング破壊	古市 英幸	〃
紫外線照射のトラッキング破壊への影響	柳 修司郎	〃
MOSインバータの試作	田中 真生, 田畑 範和 松崎 敏栄, 渡辺 百人	奈 良
非接触電磁形超音波トランスジューサ(EMAT)に関する研究	佐藤 勝利, 矢吹 和彦	渡 辺(博)
圧電すべり効果を用いたエッジモードの新しい励振法に関する研究	鈴木 義博	〃
マグネトロンスパッタ法による酸化亜鉛圧電膜の作成に関する研究	下達 誠, 川名 守	〃
マイクロマウスの走行安定性向上のためのソフトウェアの改良	榎内 康浩, 大和田俊光	春 田
ハイブリッド冗長システムの信頼度解析	福田 哲	〃
自己診断機能を考慮した定周期システムのアベイラビリティの解	三浦 武治	〃
コンピュータネットワークにおける処理システムの信頼度解析	猪狩 謙一	〃
パソコンによる音声処理のためのA/D, D/Aコンバータ設計および製作とそのサポートソフトウェアの作成	相田 亨	村 田
PC9801VMによるパソコン制御のための簡易出力インタフェース回路の設計製作および回路の動作確認プログラムの製作	飯塚 俊三	〃
高速A/D変換器の設計製作と回路の動作解析	斉藤 昌仁	〃
1ボードマイコンを用いた超音波計測システムの設計製作	久保木秀人	〃

◆工業化学科

研 究 課 題	学 生 名	指 導 教 官
小麦中の重金属有機化合物の抽出, 分離および構造解析	赤津 誠一, 大森美登里	引 地
イネ中の重金属有機化合物の抽出, 分離および構造解析	甲高 誠, 西田 恵	〃
分子模型の立体表示	赤塚 政司	大 沢
UNIFAC法による活量係数の推算	江尻 政彦	〃
散気式曝気槽内の流速分布の測定	加藤 健司, 樋口 孝典	〃

研 究 課 題	学 生 名	指 導 教 官
酸化亜鉛微粒子の加熱処理による表面化学吸着酸素の変化	安島 岳彦, 井波アリサ 今福 功	大 隈
酸化亜鉛微粒子への染料の吸着	大友 忠男	"
大気粉塵中における多環芳香族炭化水素の分析	安藤満理子	伊 藤(宏)
セリウム系ガラス研磨剤の研究	河村 勝, 鈴木 学	"
酸化亜鉛微細結晶表面に吸着した炭酸ガス及び酸素の定量	石村 隆	"
DCポーラログラフ法によるイオン会合定数の決定	猪狩 明文, 馬目 康彦	高 橋
イオン電導率に及ぼす温度効果	小野 晴市	"
混合溶液の電導率測定(連続変化法)によるイオン会合定数の決定	田辺 真一	"
エステル交換反応における酢酸塩(第1族B, 第2族B)の解媒活性	猪狩 孝則	伊 藤(正)
エステル交換反応における酢酸塩(第2族A)の解媒活性	齊藤 由美	"
エステル交換反応における酢酸塩(第1族A)の解媒活性	長谷川 茂	"
フェニル置換ポリチアゾールの熱的性質 4-フェニルチアゾール環を含むポリアミドの合成	石井 慎二, 黒木 勝仁 丹野寿美子, 馬上伊三雄	井 上
ネゴザの重金属有機化合物の抽出, 単離, 構造解析	岡部 正直, 小田 和広 四家 聖一	金 田
薬草植物中における抗癌物質の抽出	佐藤 千夏	"
極性液相を用いたガラスキャピラリカラムの作製	富岡 博隆, 鈴木 利広	小 林

◆木 土 工 学 科

研 究 課 題	学 生 名	指 導 教 官
平面応力問題の低次の三次元的な補正	小野 吉久	根 岸
補足型変分原理に基づく動的はり理論の高次化に関する研究	黒澤 秀実	"
長方形断面を有する棒の静的解析理論	田中 博文	"
変位をべき級数展開した平板曲げの微小点量理論	古川 賀也	"
漸近展開法を用いた高次平板曲げ理論	山野辺 豊	"
土木構造物施工計画に関する研究	赤井 文人	土 居
プレートガーター橋の経済的主桁間隔に関する研究	佐久間善勝	"
橋桁橋の経済的な支間と幅員に関する研究	佐藤良一郎	"
鋼トラス橋の経済的主構高の算定	鈴木 基彦	"
時系列による北上川上流の濁度の解析	大平 正	官 野
北上川上流域における濁度の予測の研究	齊藤 健一	"
北上川上流における流量, 濁度, 水温の季節特性の研究	前田 盛夫, 渡辺 孝	"

研 究 課 題	学 生 名	指 導 教 官
修正Einstein法を用いてのPO ₄ 濃度の予測について	黒澤 勝敏	橋 本
メッシュ法による汚濁負荷流出量の検討	高橋 喜孝	"
夏井川における自浄作用に関する一考察	寺島 徹	"
粘土の掃流抵抗と微生物活動との関連に関する研究	吉田 広明	"
軟岩ズリのスレーキングによる圧縮沈下について	猪狩 伸之	佐 藤
軟岩ズリの工学的性質について	岡部 睦	"
ゆるい砂地盤の液状化に関する実験	橋本 達也	"
耐震設計における入力地震動に関する考察	林 聡宏	"
液状化特性に与える振動数等の影響	星 広行	"
大規模自転車道の計画と設計	石井 政宅, 吉田 重美	高 橋
東大通りの街路計画と設計	猪股 朋弘, 小山 泰正 菅野 文雄	"
アルカリ骨材反応	杵淵 純一, 平子 哲央	志 賀
PCグラウトの低温特性について(低温養生における圧縮強度特性)	酒井 謙一	"
PC鋼材における付着特性	高橋幸太郎, 中島 賢一	"
PCグラウトの低温特性について(特にコンクリートの流動性)	渡辺 真澄	"
凍結融解を受けたコンクリートのAE法による損傷度の評価	阿部 則元	山 ノ 内
コンクリートにおける3次元AE位置標定	今井 智一	"
圧縮疲労を受けたコンクリートのAE法による損傷度の評価	斎藤 春樹	"
AE法によるコンクリートの凍結融解時の挙動に関する研究	佐藤 世一	"
AEスペクトル解析による破壊源特性の解明	鈴木 和夫	"

新 着 図 書 目 録

図書館に所在するものを
分類別受入順に記載

総 記

福島民報朝刊版 6~10月号	福島民報社
朝日新聞朝刊版 7~11月号	朝日新聞社
東洋文庫	平凡社
459 八代集 2	
460 漢書五行志	
461 江漢西遊日記	
462 和漢三才図会 5	
463 入蜀記	
民友社思想文学叢書	民友社
1 徳富蘇峰 民友社関係資料集	
いわき市史 1 原始古代中世	いわき市

哲 学

土居健郎 「甘え」の構造	弘文社
精田尊之 生と死の思想	朝日新聞社
上田礼子 人はどのように発達するか 宗教改革著作集 12 新岩波講座 哲学 16	講談社 教文館 岩波書店

歴 史

国史大辞典 7	吉川弘文館
角川日本地名大辞典 36 徳島県	角川書店
45 宮崎県	角川書店

社 会 科 学

石塚輝俊 出雲信仰	雄山閣
精田尊之 生きる権利死ぬ権利	新潮社
福岡正夫 セミナール経済学入門	日本経済新聞社
堀上 鈴 労働関係の社会学	東京大学出版会
中野 卓 商家同族団の研究 上下	未来社
岩田龍子 日本の経営の編成原理	文真堂
五来 重 美術信仰	雄山閣
三戸 公 公と私	未来社
浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見	日本経済新聞社
岩田龍子 現代日本の経営風土	同
村上泰亮 文明としてのイエ社会	中央公論社

自 然 科 学

吉永良正 まだわからないことがある (ブルーバックス)	講談社
-----------------------------	-----

日本化学会 現代化学の世界 (ブルーバックス)	講談社
ロバート・ゲロック 一般相対論入門 (ブルーバックス)	同
笹川しげる 身近な血液セミナー (ブルーバックス)	同
関根 鴻 数学ざらいの診察室 (ブルーバックス)	同
S・I・コンテ 数値解析と算法入門	ブレイン図書
武田 峻 素粒子物理学	裳華房
小島紀男 Z変換入門	東海大学出版会
千葉玄彌 分子を操る技術	読売新聞社
足立武彦 パソコン電磁気学	朝倉書店
H・ヘルテル バイオエンジニアリング	同
秋山雅彦 生命の誕生	共立出版
赤木三郎 無脊椎動物の海	同
堀田 進 魚類の時代	同
井本伸広 大森林の時代	同
徳岡隆夫 恐竜の王国	同
小林新雄 哺乳類の時代	同
西井胡一 氷河時代と人類	同
J・チャーファス 生物の進化 最近の話題	同
日本化学会 身近な現象の化学	培風館
下村 孟 最新毒物創制取扱いの手引	時事通信社
近藤 保 やさしいコロイドと界面の化学	三共出版
デビット・ランバート 恐竜の百科	平凡社
太田次郎 絵ときバイオテクノロジー用語早わかり	オーム社
新津 俊良 図説現代生物学	丸善
世界科学大事典 20~21巻	講談社
理科年表 1986年 1987年	丸善
実験物理学講座 14 表面 微粒子	共立出版
25 宇宙放射線	
化学便覧 応用化学編	丸善
太刀川基治 超電導	読売新聞社
三浦宏文 ロボットの未来学	読売新聞社
南 茂夫 科学計測のための波形アーク処理	CQ出版
新素材研究開発要覧 産業開発調査会	
最新部品供給技術総覧 産業技術サービス	
編本英文 刃物科学事典 (ブルーバックス)	講談社
レオンハルトのコンクリート講座	鹿島出版会

工 学

2 鉄筋コンクリートの設計	
3 鉄筋コンクリートの配筋	
4 コンクリート構造の境界状態と変形	
5 プレストレストコンクリート	
6 コンクリート橋	
土木技術者のための援助便覧	土木学会
土木学会規準 昭和61年版	同
コンクリート標準示方書	設計編 同 施工編 同 舗装・ダム編 同
新体系土木工学	技報堂
38 鋼構造物の設計	
80 海岸・港湾調査法	
土木工学会 杭基礎の設計法とその解説	土木工学会
藤重昇永 不思議なエンジニアリングプラスチック	読売新聞社
森 彰英 ガリウムひ素最先端	同
古川勇二 FMS	日刊工業新聞社
館 鐘 メカトロニクスのはなし	同
ニューセラミックス懇話会 ニューセラミックス	同
清水正之 図解流体力学の学び方	オーム社
宗 孝 機械要素の設計基準	日刊工業新聞社
ファインセラミックスハンドブック	オーム社
機械工学便覧B1 機械要素設計	日本機械学会
常山昌男 新素材・先端材料のすすめ 上下	培風館
日本機械学会 マイコン利用技術	コロナ社
フィリポフ タービンの熱計算	文一総合出版
黒沢 誠 内燃機関	コロナ社
小熊 正 機械設計 3	パワー社
斎藤武雄 数値伝熱学	養賢堂
佐藤良男 ポンプ	省エネルギーセンター
日本機械学会 最新の生産加工技術	コロナ社
岩田一明 生産システム学	同
石川 欣造 未来をひらく新素材	森北出版
大和久重雄 設計・材料・熱処理	日刊工業新聞社
長江 正彦 設計工学概論	同
山田伸志 振動工学入門	パワー社
金風熱処理技術便覧	日刊工業新聞社
原田 介 基礎電子回路	コロナ社
内藤 義之 マイクロ波・ミリ波工学	同
最新C-MOSIC規格表 1986	CQ出版
最新産業用リニアIC規格表 1986	同
最新モノリシックOPアンプ規格表 1986	同
最新ハイブリッドOPアンプ規格表 1986	同
相良 昌男 LSIで産業社会はこう変わる	日刊工業新聞社
末松安晴	

光デバイス コロナ社
 高川 洋 現代デジタル通信方式 オーム社
 渋谷 昇 実験で学ぶ電子回路設計ノート 日刊工業新聞社
 最新センサ規格表 1986 CQ出版
 日本編成制御工学会技術発表会講演論文集 日本編成制御工学会
 日本畜産学会秋季研究発表会講演論文集 昭和61年 日本畜産学会
 野口 靖夫 新しい電子の眼 CCD 読売新聞社
 黒川 浩助 太陽電池の時代 同
 三谷 政昭 パソコンで学ぶ基礎電子回路 森北出版
 松野 寿夫 GP-IBインターフェースの使い方 日刊工業新聞社
 宮本 俊作 電気電子設計図法 東海大学出版会
 樋口 隆雄 デジタル信号処理の基礎 昭晃堂
 マコーダック コンピュータは考える 培風館
 B・P・ラシィ 詳解デジタルアナログ通信方式 下 CRS出版
 プロダクトデータブック CQ出版
 栗原 豊 絵とき電子回路の計算 オーム社
 関 英男 電子工学概論 電気学会
 柳沢 健 回路理論基礎 同
 新日本無線 '86半導体データブック 新日本無線
 R・V・Stuart 入門真空薄膜スパッタリング 日刊工業新聞社
 上向井照彦 BASIC+機械語によるパソコン計測制御 同
 押野 崇芳 BASIC+機械語プログラムによるディスク活用技法 同
 河西 朝雄 Cプログラミング技法 ナツメ社
 磯部 俊夫 マイコンによるCAD 培風館
 荒井 孝雄 最新のAV機器とデジタル技術 コロナ社
 ソニー半導体集積回路データブック 1986 ソニー
 片岡 巖 パソコンワープロのキー入力を10倍速くする法 技術評論社
 三菱半導体データブック 1986 誠文堂新光社
 天野 英晴 だれにもわかるデジタル回路 オーム社
 小池 慎一 はじめてのPascal 技術評論社
 藤本文彦 98マシン語 同
 初歩のデジタル回路 技術評論社
 1 基礎からのデジタルIC
 2 デジタル情報回路の基礎
 3 手作りマイコン
 4 Z-80 実用マイコン製作
 Wittfohl Building Bridges Beton-Verlag

産 業

競走馬総合研究所 馬の科学 (ブルーバックス) 講談社
 安延 義弘

実らせるミニ果樹園 (ブルーバックス) 講談社

芸 術

矢部京之助 疲労と体力の科学 (ブルーバックス) 講談社

語 学

英検合格者のための2級実用英語教本 日本英語教育協会
 実用英語検定 2級全問題集 同

文 学

昭和文学全集
 12 川端康成 横光利一 田本かの子 小学館
 太宰治 小学館
 寺田寅彦全集 文学篇 13~16 岩波書店